



# Support

<http://www.city.niigata.lg.jp/kosodate/gakko/index.html>

No. 11

平成28年12月14日

編集・発行

学校支援課 広報担当

## 教育フォーラムから学んだこと

11月12日に新潟市教育フォーラム2016「いじめのない社会を目指して、今、わたしたちにできること」を実施いたしました。鳴門教育大学特任教授 森田洋司様によるご講演内容の一部を紹介しします。各学校での取組をすすめる際の参考にしてください。



### 社会的な絆づくりと居場所づくりが大切！

#### ソーシャル・ボンド 個人を社会と結びつける力

自分が所属する学校・学級や集団が自分にとって意味のあるものという「実感」が、その場のルールを守ったり、そこで共同生活をしている人たちを大切に思ったりする気持ちを育みます。

「ソーシャル・ボンド」の育成には、「集団が個人を一員として集団に組み込んでいく力」と、「個人が感じる集団への愛着や意味のあるつながり」の相互作用が重要です。

「いじめ」「不登校」は、子どもが所属している集団が、その子に成就感や自己肯定感、社会的有用感などを感じさせることができているかが問われる問題です。



役割や仕事を受けもつことも、その集団にとって大切な存在であることの証となるのよ。

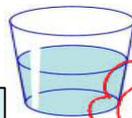
#### 自己肯定感の実感 居場所づくりの基盤

できなかったことに着目する減点社会からできたことを認める加点社会へ発想を変えることで、今あるその人の存在そのものを肯定し、そこからどう伸びていこうとしているのかを褒めることができます。



半分しかない。  
1杯にはたりないわ。

#### 下のコップの中の水の量をどう見ますか？



半分もたまっているね。  
だいぶ増えたね。



#### 【できなかったことに着目する減点社会】

- 基準は100%→半分減っている
- いっぱいでないことを問題視する

#### 【できたことを認める加点社会】

- 基準は0%→半分入っている
- どれだけ増えているかを考える

**ここが  
大切！**

### 「減点社会」から「加点社会」への発想の転換を！

誇りと自信は他の人と比較することでは得られません。今あるその人の存在そのものを肯定し、集団から認められることで、自己肯定感や自己有用感が育まれます。その結果として、集団の一員としての自覚が生まれ、ソーシャル・ボンドが強くなっていきます。このつながりこそが、安心・安全で快適な社会を生み出すきっかけとなり、いじめを止める力となっていきます。

まず、わたしたちが加点社会を！！

# 「ESD」の取組を教育計画に！

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で持続可能な社会づくりの担い手を育む教育のことです。本市、教育ビジョン第3期実施計画にも、NEXT5（社会の変化や新たな課題に対応できる教育の推進の新規事業）の1つとして位置づけられています。自校の教育計画のどこがESDと関連するのかを明確にし、持続可能な社会の担い手を育む取組を継続・強化していきましょう。

H27の実践状況調査：「各教科等における指導内容を明確にし、ESD（持続可能な開発のための教育）の観点から自校の教育活動に位置付けていますか。」

→ 位置付けていると回答した 小学校（53%）、中学校（32%）



手順は  
こちら！

## ステップ1 選択

各教科の年間指導計画や教育計画を確認し、ESD「持続可能な社会の担い手を育む」指導に適した内容や取組を選ぶ。

## ステップ2 重点化

選んだ内容や取組の中から、学校で重点的に取り組むものを決める。

## ステップ3 教育計画に明示

教育計画、各教科年間指導計画等の中に「ESD」マークを記載する。

（参考：「H27サポート第8号、平成27年12月1日発行」）

### 小学校 6年理科の例

月	単元名	主な学習活動	時数
12	水溶液の性質	①水溶液の違いを調べる ② ESDの視点を入れて指導が可能な活動と考えられるところにマークする。 ③	10
1	電気と私たちの生活	①生活の中の電気 ②電気をつくる ③電気をためる <b>ESD</b>	12
2 3	人と環境 <b>ESD</b>	①人と空気 ②人と水 ③人と植物	8

単元全体でESDの視点を入れて指導が可能な活動と考えられるところは単元名にマークする。



## ステップ4 指導の実施

重点化した単元や内容を指導及び取組を実施する際に、「持続可能な社会の担い手を育む」という視点を具体化する。

ESDという視点から捉え直すことにより、具体的な教育活動の展開に明確な方向付けができます。また、指導者もESDの視点をもって意識的に展開することが可能となります。来年度の計画を立案する機会に、できるところから是非検討願います。